

【旧約聖書日課】 出エジプト記 2章1～10節

¹レビの家の出のある男が同じレビ人の娘をめとった。²彼女は身ごもり、男の子を産んだが、その子がかわいかったのを見て、三か月の間隠しておいた。³しかし、もはや隠しきれなくなったので、パピルス（紙）の籠を用意し、アスファルトとピッチで防水し、その中に男の子を入れ、ナイル河畔の葦の茂みの間に置いた。

⁴その子の姉が遠くに立って、どうなることかと様子を見てみると、⁵そこへ、ファラオの王女が水浴びをしようと川に下りて来た。その間侍女たちは川岸を歩き来していた。王女は、葦の茂みの間に籠を見つけたので、仕え女をやって取って来させた。⁶開けてみると赤ん坊がおり、しかも男の子で、泣いていた。王女はふびんに思い、「これは、きっと、ヘブライ人の子です」と言った。⁷そのとき、その子の姉がファラオの王女に申し出た。「この子に乳を飲ませるヘブライ人の乳母を呼んで参りましょうか。」

⁸「そうしておくれ」と、王女が頼んだので、娘は早速その子の母を連れて来た。⁹王女が、「この子を連れて行って、わたしに代わって乳を飲ませておやり。手当てはわたしが出しますから」と言ったので、母親はその子を引き取って乳を飲ませ、¹⁰その子が大きくなると、王女のもとへ連れて行った。その子はこうして、王女の子となった。王女は彼をモーセと名付けて言った。「水の中からわたしが引き上げた（マーシャー）のですから。」

【使徒書日課】 ヘブライ人への手紙 3章1～6節

¹だから、天の召しにあずかっている聖なる兄弟たち、わたしたちが公に言い表している使者であり、大祭司であるイエスのことを考えなさい。²モーセが神の家全体の中で忠実であったように、イエスは、御自身を立てた方に忠実であられました。³家を建てる人が家そのものよりも尊ばれるように、イエスはモーセより大きな栄光を受けるにふさわしい者とされました。⁴どんな家でもだれかが造るわけです。万物を造られたのは神なのです。⁵さて、モーセは将来語られるはずのことを証しするために、仕える者として神の家全体の中で忠実でしたが、⁶キリストは御子として神の家を忠実に治められるのです。もし確信と希望に満ちた誇りとを持ち続けるならば、わたしたちこそ神の家なのです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 6章27～35節

²⁷朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。父である神が、人の子を認証されたからである。」²⁸そこで彼らが、「神の業を行うためには、何をしたらよいでしょうか」と言うと、²⁹イエスは答えて言われた。「神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業である。」³⁰そこで、彼らは言った。「それでは、わたしたちが見てあなたを信じることができるように、どんなしるしを行ってくださいますか。どのようなことをしてくださいますか。」³¹わたしたちの先祖は、荒野でマンナを食べました。『天からのパンを彼らに与えて食べさせた』と書いてあるとおりです。」³²すると、イエスは言われた。「はっきり言うておく。モーセが天からのパンをあなたがたに与えたのではなく、わたしの父が天からのまことのパンをお与えになる。」³³神のパンは、天から降って来て、世に命を与えるものである。」³⁴そこで、彼らが、「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください」と言うと、³⁵イエスは言われた。「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。」

命のパン【こども説教のために】

「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください」と、主イエスに願う者たちがありました。主イエスが、「天の父が天からのまことのパンをお与えくださる」と言われたからです。それにしても、少し厚かましい願いのようにも思えます。「パンをいつもください」です。この人たちは、自分で働いてパンを得るかわりに、主イエスからもらおうとしているのでしょうか。

たしかに、主イエスは五千人の人たちが集まっていたときに、五つのパンと二匹の魚しかなかったのに、皆が満腹するまでパンをお与えくださるということがありました。昔、モーセが導いて荒野を旅した人々に天からのパン、マンナが与えられたときのように。主イエスであれば、「パンをいつもください」と願っても、それを叶えてくれる。そう思ったのでしょう。

主イエスは、「わたしが命のパンである」とおっしゃいました、「わたしを食べれば、飢えることがない」と。それは、わたしたちが食べ物として知っているパンとは違うように思えます。でも、それこそが、わたしたちに本当に必要な食べ物だと、主イエスはおっしゃるのです。

主の祈りで、「わたしたちの日ごとの糧（パン）を今日もお与えください」と祈ります。わたしたちも、そう願ってよいのです。わたしたちに必要な「命のパン」は、必ず天からお与えいただけるでしょう。

「マンナ」を食べた

先週は、日曜日に逝去された教会員の K 兄のご葬儀を、ご自宅でご家族と共に執り行わせていただきました。少しばかり急なことで、ご家族の皆さんにとっては、もしかするとまだ実感が伴わないことかもしれません。

K 兄の葬儀に際して、9 年前のイースター礼拝で洗礼を受けられた後に教会報「あゆみ」にご寄稿くださった文章を紹介いたしました。そこには、かつて学生時代に賀川豊彦牧師のもとで礼拝生活をされたことと共に、洗礼の決意を深められた出エジプト記の聖句、「昼は雲の柱をもって導き、夜は火の柱をもって彼らを照らされた」（出 13:21）が繰り返し記されていました。今日の旧約日課で誕生譚が伝えられている「モーセ」の物語の一節です。

モーセは、80 歳で神に呼びかけられ、エジプトに住むイスラエルの人々を連れ出し、神の約束された地に導くという働きに召し出された人です。

モーセが追っ手を逃れてエジプトから導き出した民と最初に直面したことは、「水」と「パン」の問題でした。殊に「パン」の問題は、深刻でした。彼が連れ出した人々は、エジプトで苛酷な生活を強いられていたとされますが、実際には、「肉のたくさん入った鍋の前に座り、パンを腹いっぱい食べられ」（出 16:3）る生活をしていたのです。人は、食が満たされていれば、それ以外の生活が不自由であったとしても、慣らされてくるものなのかもしれません。食糧が尽きて不平不満を訴える人々に対して、モーセも穏やかに対応できなかったようです。「主なる神が導いてくださっているというのに、我々が何者なので、我々に向かって不平を述べるのか」（出 16:7）と、モーセは腹を立てています。結局、人々を宥められないモーセに代わって、天からのパン、「マンナ」を与えてくださったのは、主なる神でした。人々は、その旅の終わりまで、毎朝、「マンナ」を集めて食べ続けたのです。

二年前のコロナ禍でまだ様々な自粛をしていた中でしたが、子どもたちの夏プログラムに向けて子どもたちと「モーセ物語」に取り組み、その一環として「マンナ」というビスケットを食べる機会がありました。赤い箱のパッケージが印象的な幼児向けの菓子です。1930 年発売の菓子ですから、多くの方が知らずに食べているかもしれません。もちろん、その名称は、「聖書」の「マンナ」から取られているのです。

エジプトを出た人々も、わたしたちも、いつの間にか、「マンナ」を与えられ、食べてきたのでしょうか。それを、主イエスは思い起こさせようとなされたのかもしれません、五千人をパンで満腹させることによって。

それは、「天からのパン」なのです。わたしたちの体だけでなく、人として生きるために必要な養いとなる「糧」です。自ら求めなくとも、それは、恵みとしてすでに与えられている。あなたは、それに気づいているか、と。

「命のパン」を受け渡す

わたしたちは、自分で努力して獲得したものを忘れてしまうことは、滅多にないでしょう。求めて得たものを、容易には手放さないものです。けれども、それによってわたしたちに大切なものがすべて得られるかと言えば、そうとは言えないのではないのでしょうか。わたしたちが人として生きていくために必要なことの多くは、実のところ、自分で求めるより先に、差し出され、与えられ、得られるようになっているのです。「マンナ」のように。

モーセ物語の中で、「マンナ」は、毎朝、その日に必要な量だけが与えられたと描かれています。その必要な量は、人それぞれです。「ある者は多く集め、ある者は少なく集めた。しかし…多く集めた者も余ることなく、少なく集めた者も足りないことなく、それぞれが必要な分を集めた」(出 16:17~18) というのです。

人は、確かに欲張るものです。少しでも多く得ようと、余裕のあるうちに貯めておこうと、躍起になります。そうしないと、得られないときに困ると思うのです。「キリギリス」であるよりも、「アリ」であるべきだと考える。もちろん、「キリギリス」の生き方をする者もあるでしょう。そのような者の姿を見て、「アリ」のわたしたちは、どこか憧れながらも、「あのようになってはいけない」と思うのかもしれない。確かに、いにしへの賢者は、聖書に箴言を残しています。「怠け者よ、蟻のところに行って見よ。その道を見て、知恵を得よ…」(箴言 6:6~8)。もっとも、かつて蟻を材料に生態学の研究をしていた者として言わせてもらえば、働きアリの中で本当に働いているのは2割だけで、6割は怠けながら、残りの2割は完全に休んでいるようです。ところが、働いているアリを除いてやると、怠けていたり休んでいたアリの中から、ちゃんと働くアリが出てくるのです。そうして、アリの社会は成り立っているのです。

パンを求める人々に「**わたしが命のパンである**」と言われた主イエスは、ご自分の命を差し出されるほどの働きをなさって、弟子たちに神の恵みの真理をお示しになられたのです。そのときには、弟子たちには分かりませんでした、主イエスのお働きによって自分たちが生かされていることが。けれども、主イエスが死なれた後、弟子たちは、確かに変えられたのです。主イエスからパンをいただき、主イエスという「命のパン」をむさぼるばかりであった弟子たちが、変えられて、彼ら自身、「命のパン」として自らを差し出し、人々に命の真理をえささせるための働きに尽くし始めたのです。

その後が続いた先達によって、今のわたしたちがあるのです。「マンナ」は与えられ、「命のパン」は与えられています。それを次の者たちに受け渡すことができるかどうかは、わたしたちに託されているのです。